

姫路城に関する絵図や文献史料を見ていると、「本城」という記載があるのに気づく。この言葉は三の丸の御殿とその曲輪にしか使用されないのである。このことはとても重要で、姫路藩士の感覚では、「城」と言えば三の丸御殿にほかならなかったのである。姫路城の「本城」が描かれた「播州姫路城図」（中根忠之氏蔵）は極めて貴重な史料といえる。

さて、この絵図を最初に見たとき、私たちの目を驚かせたのは、向屋敷の池であった。池の東には石塁の背後を利用した築山（もしくは塘）があり、広い庭園であったことは間違いない。岡山御後園や金沢兼六園などに比べれば規模は小さいが、いわゆる大名庭園の存在とその規模が判明した点では、姫路城の資料としては画期的である。

姫路古文書研究会の方のご教示によると、『玄武日記』安永7年（1778）正月14日条に向屋敷での出来事が記されているという。この日、藩主酒井忠以は終日ここで過ごしている。夕方まで俳諧を楽しみ、それが終わると茶立を行っている。正客は3人。茶席へは小舟で向かっているから、池に舟を浮かべ、向屋敷との間を行き来していたとみて間違いない。この時、舟は「活魚潭」を通航しているから、池にそうした名称の淵があって、時にはそこで釣りをするような趣向があったのかもしれない。

忠以といえば茶人としても有名である。その彼が向屋敷で催す茶に招かれることは、客にとっては非常に栄誉なことだったと思われる。また本城の庭園がこのようなものであったとすると、上級家臣宅の作庭にも影響を与えていた可能性は高い。

詳細はこれから調べていく必要があるが、姫路城の文化的・歴史的評価というのは、三の丸の機能やそこでの出来事を抜きにして語ることはできないのである。



藩主の風流

城内の大庭園と御殿

「播州姫路城図」：部分（中根忠之氏蔵）

向屋敷庭園の施設

御茶屋

ら／櫓（3重櫓）
向屋敷の縁側から見ると、築山の最奥に、高層建物が見える。大天守を擬した演出か。

数寄屋

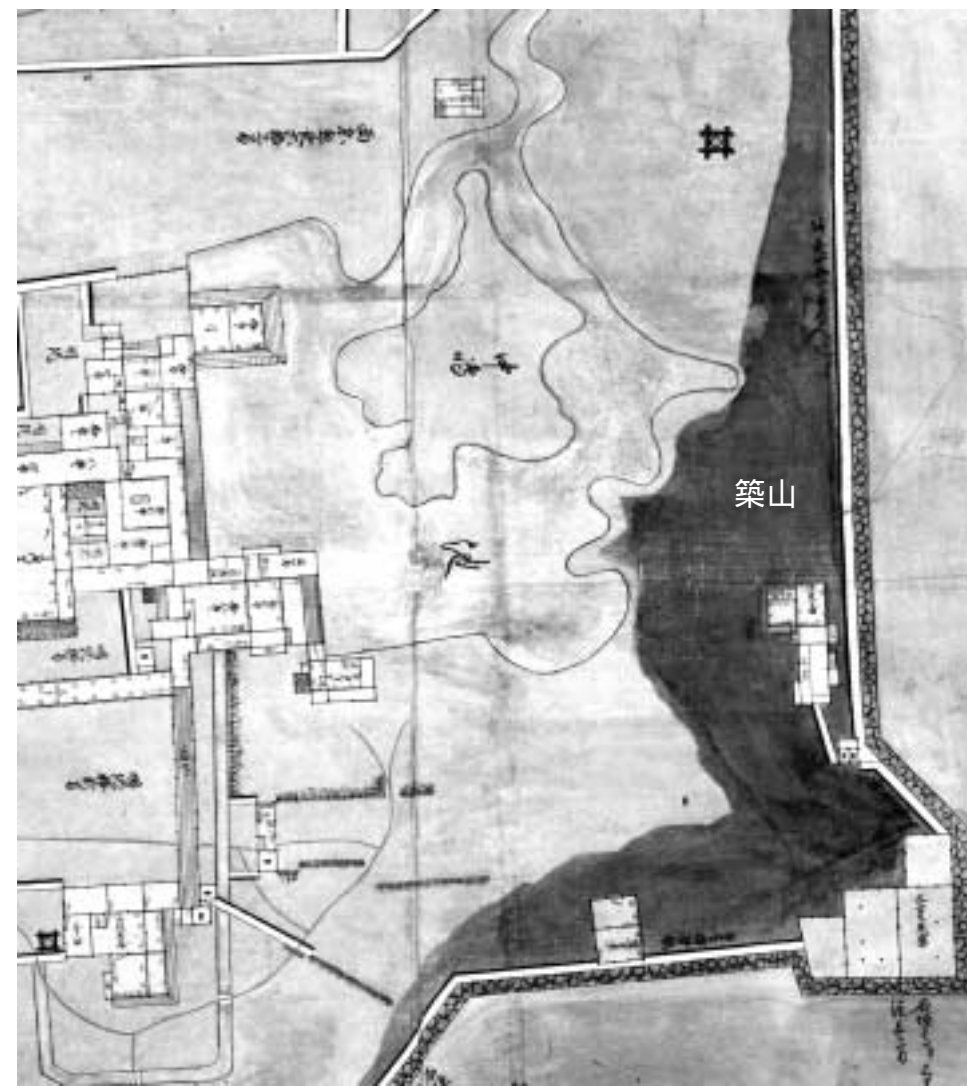
腰掛

2重櫓
「観風楼」?

水面に降りる階段が描かれ、舟が着くようになっているらしい。

地形からして、この辺りに、滝がありそうな...

蓬萊山?



補記

6月に赤穂城二の丸跡で発掘された錦帯池も、向屋敷庭園と同じ性格のものと思われる。錦帯池は復元整備されるから、姫路城の庭園を考えるうえで参考になる。完成が大いに期待される。

参考資料：「史跡赤穂城跡二の丸錦帯池発掘調査現地説明会資料」赤穂市教育委員会、1999年

城郭研究室ニュースの創刊にあたって

室長 武田 茂

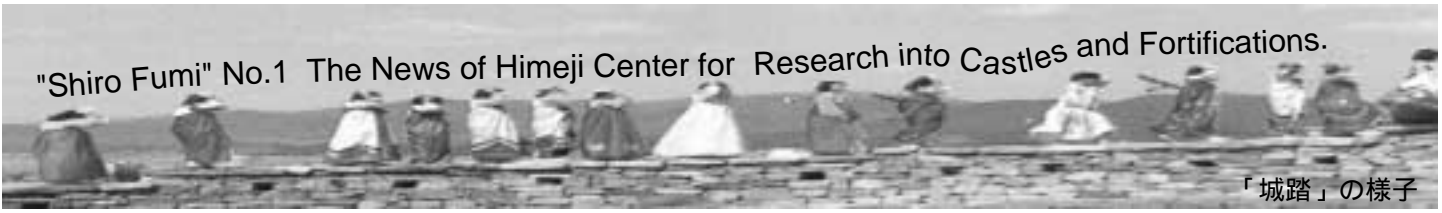
平成2年4月1日、姫路城のふもと、姫路市本町68番地に日本城郭研究センターが、国宝姫路城を中心に全国の城郭研究と中近世にわたる歴史を掘り起こし、情報の拠点になることによって、教育・文化の発展に寄与することを目的に設立されてから、10年の歳月がたちました。

その間、平成5年12月に国宝姫路城が法隆寺とともに世界文化遺産に登録されたこともあって、当センターの調査・研究を担う城郭研究室の使命もますます重くなってきました。

幸い、昨年、姫路藩主であった本多家の家老を務めた中根家より、第2次本多時代当時の姫路城の内郭部を克明に描いた絵図が発見され、姫路城研究に新たな視点が見出せたことは、望外の喜びであります。

一方、当研究室では市民の皆さまに研究の成果や話題になっている城郭、歴史等をテーマに市民セミナーをオープン当初から開講して参りました。講師先生の充実し、魅力ある講演のお陰で好評を博し、今や市民の皆さまに親しまれております。

このたび、城郭研究室の活動成果として、これまでの市民セミナーの足跡を中心に、集積された情報などをまとめてみました。この小誌が活用され、皆さまの城郭研究にお役に立つよう願っております。



"Shiro Fumi" No.1 The News of Himeji Center for Research into Castles and Fortifications.

「城踏」の様子